

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	山根直子
論文題目	尾崎翠研究——〈読むこと〉と〈書くこと〉、後期連作を中心に——		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、近代日本の作家、尾崎翠(一八九六～一九七一)の代表作「第七官界彷徨」(『文学党员』一九三一年二月～三月、『新興芸術研究』一九三一年六月)、「歩行」(『家庭』一九三一年九月)、「こほろぎ嬢」(『火の鳥』一九三二年七月)、「地下室アントンの一夜」(『新科学的文芸』一九三二年八月)の四作品を、連作として論じたものである。</p> <p>序章では、尾崎翠の生涯とこれまでの研究状況が概観され、本論文各章のアウトラインが示される。</p> <p>本論第一章「「第七官界彷徨」論——「蘚の恋」をめぐって——」では、尾崎翠作品における「苔」「蘚」の使い分け等から、本作中の「蘚」がマルダイゴケと特定される。さらに、マルダイゴケが雌雄同株で自家受精によって繁殖するのを「両性具有の恋」とした上で、これが「こほろぎ嬢」における心理的両性具有の詩人「ありあむ・しやあぶ」と、彼が分心として創作した女性「ふいおな・まくろおど」との恋愛関係に重ねられ、他者を必要としない自己完結した恋であることが指摘される。これは、女主人公小野町子の片思いによる失恋とも共通する。フロイトの昇華理論に接した翠は、創作意欲を減衰させる結婚・出産へと繋がる恋を町子に忌避させるため、こうした設定を行ったと結論される。</p> <p>第二章「「歩行」論——〈身体の歩行〉と〈意識の歩行〉、自己離脱の方法として——」では、作品冒頭の詩の「ひとりあゆみて」「風とともにあゆみて」が〈身体の歩行〉だけでなく〈意識の歩行〉の意味も持つことが、翠の他作品、すなわち「花束」の「心の道草」、「詩人の靴」の「特殊な散歩」(眼の散歩)、「映画漫想」の「漫想家的彷徨」「脚のほかの散歩」などの用例から推論される。〈意識の歩行〉とは、〈読むこと〉、すなわち、追想したり、見たり、読んだり、書いたり、空想したりして自己の意識をその対象へと離脱させることである。町子は、土田九作から贈られた上記の詩の心情に、幸田当八への失恋の悲しみを重ね合わせ、それを本作として語り、また繰り返して追憶することで、すなわち〈意識の歩行〉を繰り返すことで、やがてその悲しみは癒されていく、と考察される。</p> <p>第三章「「こほろぎ嬢」試論——「図書館」「産婆学の暗記者」をめぐって——」では、作中の図書館について、鳥取県(尾崎翠の出身地)と東京の図書館すべてが検証され、当時上野公園にあった帝国図書館(現在の国立国会図書館)がモデルであったことが解明される。次に、帝国図書館における女性の利用実態が宮本百合子・吉屋信子ら同時代の女性作家の言及から明らかにされる。さらに、本作執筆時の翠が鎮痛薬ミグレンの常用によって幻覚に悩まされていたことが、複数の翠作品や林芙美子らのエッセイから明らかにされる。以上を踏まえて、地下の薄暗い食堂で身動きもせず勉強するなど不自然</p>			

な「産婆学の暗記者」は、従来説のような実在の人物ではなく、こほろぎ嬢による幻覚であり、本作は当時の翠を色濃く投影した私小説的作品と論じられる。

第四章「「こほろぎ嬢」論——「分心」共同体としての語り手——」では、尾崎翠の上記四作品を連作とする観点から、本作の語り手「私たち」とは、「こほろぎ嬢」(尾崎翠)が創作した「歩行」「地下室アントンの一夜」の作中人物小野町子と土田九作であることが論じられる。「こほろぎ嬢」と町子・九作の関係は、前掲の「ありあむ・しやあふ」と「ふいおな・まくろおど」を創造主—被造物の関係において踏襲したものであること、九作の町子への恋は虚構の人物(「分心」)同士の恋という点で実在の「しやあふ」から虚構の「まくろおど」(「分心」)への恋とは相違するものの、男女の恋という外枠は共通することが指摘される。その上で、本作「こほろぎ嬢」が町子と九作という「分心」共同体による合作であることが、史実のシャープとマクラウドの合作や、「新嫉妬価値」(『女人芸術』一九二九年十二月)の「私」と「耳鳴り」による詩の合作の例を援用して解明される。その上で、本作は男性の創造主による女性被造物というピグマリオンの構造を脱構築し、被造物が作者を語るという文学史的に興味深い作品と結論される。

「歩行」の姉妹編で、「こほろぎ嬢」と同じく「私たち」を語り手とするのが「地下室アントンの一夜」である。第五章「「地下室アントンの一夜」論——「風」に吹かれること、複数化する「私」——」では、町子に失恋した九作が詩を書けるようになるには、本論文第二章の〈意識の歩行〉と同様に、自己の感情を対象に移入させ、そこに自身の心情を見出すことが必要と論じられる。「風」すなわち「当八ノオト」に触発された九作は、自身で仮構した「地下室アントン」に自らを離脱させ、さらに自己を複数の「分心」、すなわち幸田当八と松木(「松木日記」の筆者)に投影し、彼等と交流することで、一時的に失恋の痛手から癒され、詩を書けるようになることが考察される。

終章では、各章の内容が概観された後、尾崎翠が〈読むこと〉〈書くこと〉を通じてその対象に自己を離脱させることで自身の分心を作り、その複数の自己との交流を創作の方法としていたことが、上記連作に即してまとめられる。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、近来とみに人気の高まっている尾崎翠の代表作「第七官界彷徨」「歩行」「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」について、相互に関連性を有する連作として精緻な読解を行ったものである。

第一章「「第七官界彷徨」論——「蘇の恋」をめぐって——」では、まず、従来ゼニゴケかマルダイゴケかで説が分かれていた作中の蘇について、「苔」と「蘇」の用字の使い分けや詳細な植物学の知見によって、マルダイゴケと特定した点が評価される。その自家受精による繁殖から、「ありあむ・しやあぷ」とその分心「ふいおな・まくろおど」との自己完結した恋を導き、さらに小野町子の片思いによる失恋との類似性を指摘した点、また、町子の片思いには、フロイトの昇華理論を援用し女性作家として結婚・出産へと繋がる恋を忌避させる意図があったとした点は、説得的かつ秀逸な解釈で、実証性と読解を両立させた好論である。

第二章「「歩行」論——〈身体の歩行〉と〈意識の歩行〉、自己離脱の方法として——」では、作品冒頭の詩の「ひとりあゆみて」「風とともにあゆみて」が〈意識の歩行〉の意味をも持つことを、翠の他作品の用例から考察した点が評価される。一見突飛な指摘とも思われるが、豊富な用例はその推断に説得性を与えている。九作から贈られた詩の心情に自己を没入させる〈意識の歩行〉を繰り返すことで、失恋の悲しみが癒されるという結論は、従来の「歩行」論に一石を投じている。

第三章「「こほろぎ嬢」試論——「図書館」「産婆学の暗記者」をめぐって——」では、まず、「こほろぎ嬢」が訪ねる図書館について、尾崎翠の故郷鳥取県と、当時翠が居住していた東京の図書館を悉皆調査し、帝国図書館をモデルと特定した実証性が高く評価される。さらに、「こほろぎ嬢」とは対照的に実学に勤しむ「産婆学の暗記者」は従来実在の人物とされてきたが、これを翠のミグレニン常用による幻覚と推断した点は、大胆過ぎるかも知れないが、これによって「産婆学の暗記者」に関わる不自然さが解消されることは確かであり、自らの「分心」と声を使わない会話をする「こほろぎ嬢」の孤独が浮き彫りとなる。優れた読解といえよう。

同じく「こほろぎ嬢」を分析した第四章「「こほろぎ嬢」論——「分心」共同体としての語り手——」では、語り手「私たち」の正体について、「ありあむ・しやあぷ」と「ふいおな・まくろおど」との関係から、作者尾崎翠をモデルとした「こほろぎ嬢」が創作した小野町子と土田九作(「歩行」「地下室アントンの一夜」の作中人物)とした点は、従来説の問題点を解消しており、一定の説得性を持つ。さらに、町子と九作という「分心」共同体による合作が本作であるとし、被造物(町子と九作)が逆に作者(こほろぎ嬢)を語るとした点は、尾崎翠のさらなる評価に繋がり得る斬新な着眼であろう。

「こほろぎ嬢」と同じく「私たち」を語り手とする「地下室アントンの一夜」を論じた第五章「「地下室アントンの一夜」論——「風」に吹かれること、複数化する「私」——」では、本論文第二章での失恋した町子と同様、失恋した九作が詩を書けるようになるためには、〈意識の歩行〉によって「地下室アントン」に自身を離脱さ

せ、複数の「分心」と交流することが必要とされる。精緻な読解の光る論といえる。

以上、各章に即して個々の作品解釈を評したが、本論文で特筆すべきは、上記四作品を連作として精読したことにある。従来、個々の作品論は盛んだったが、本論文によってこれまで見えてこなかった相互の連関が明らかとなった。たとえば、「こほろぎ嬢」と「地下室アントンの一夜」を連関させることで「私たち」の正体がはじめて明らかとなり、「歩行」と「地下室アントンの一夜」を連関させることで〈意識の歩行〉の重要性が確認された。さらに、これら四作に通底するのは「ありあむ・しやあぶ」とその分心「ふいおな・まくろおど」との自己完結した恋であり、フロイトの昇華理論による翠(こほろぎ嬢)の孤独であった。

終章で再確認されたように、これらの連作では「私」が分裂した自らと交流する。〈読むこと〉によって仮象の世界に没入した翠は、〈書くこと〉によって自らの現実を仮象に変容させ、そこに自らを解放した。本論文によって示された斬新かつ繊細な尾崎翠像は、さらなる評価を翠にもたらずであろう。

確かに、本論文の読解はあくまで一つの仮説であり、従来の研究と見解を異にする点も多く、今後、再検討を要請される可能性もあろう。しかしながら、尾崎翠の全作品と誠実に向き合い、深く読み込んだ本論文の成果は一定の強度を持ち、今後の尾崎翠研究に資することは疑うべくもない。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年1月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版慣行上の支障が無くなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降